

第3回“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」審査会次第

日 時：平成28年1月22日（金）

13：00～15：00

場 所：ホテル本能寺5階「雁」

1 開会

2 議事

「京のきもの文化 - 伝統の継承と新たなきもの文化の創出」（最終案）について

3 閉会

【配布資料】

①次 第

②名 簿

③配席図

④資 料

資料1 市民意見募集の結果について

資料2 前回審査会からの選定案の主な変更について

資料3 「京のきもの文化 - 伝統の継承と新たなきもの文化の創出」（最終案）

資料4 今後の予定について

参考資料 第2回審査会摘録

“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」審査会委員名簿

(委員長及び副委員長以外は五十音順, 敬称略)

	氏 名	役 職
委員長	柿野 欽吾	京都産業大学理事長
副委員長	山路 興造	京都市文化財保護審議会委員
委員	池田 佳隆	(公財)京都和装産業振興財団理事長 京友禅協同組合連合会理事長
委員	井上 安寿子	京舞井上流
委員	太田 達	(公財)有斐斎弘道館代表理事
委員	金剛 育子	(公財)金剛能楽堂財団業務執行理事
委員	田中 京子	市民公募委員
委員	野瀬 兼治郎	京都織物卸商業組合理事長
委員	服部 正毅	西陣織工業組合副理事長
委員	藤井 浩一	(特非)きものアルチザン京都理事長
委員	宗田 好史	京都府立大学生命環境学部教授
委員	山崎 さちよ	市民公募委員
委員	吉田 満梨	立命館大学経営学部准教授

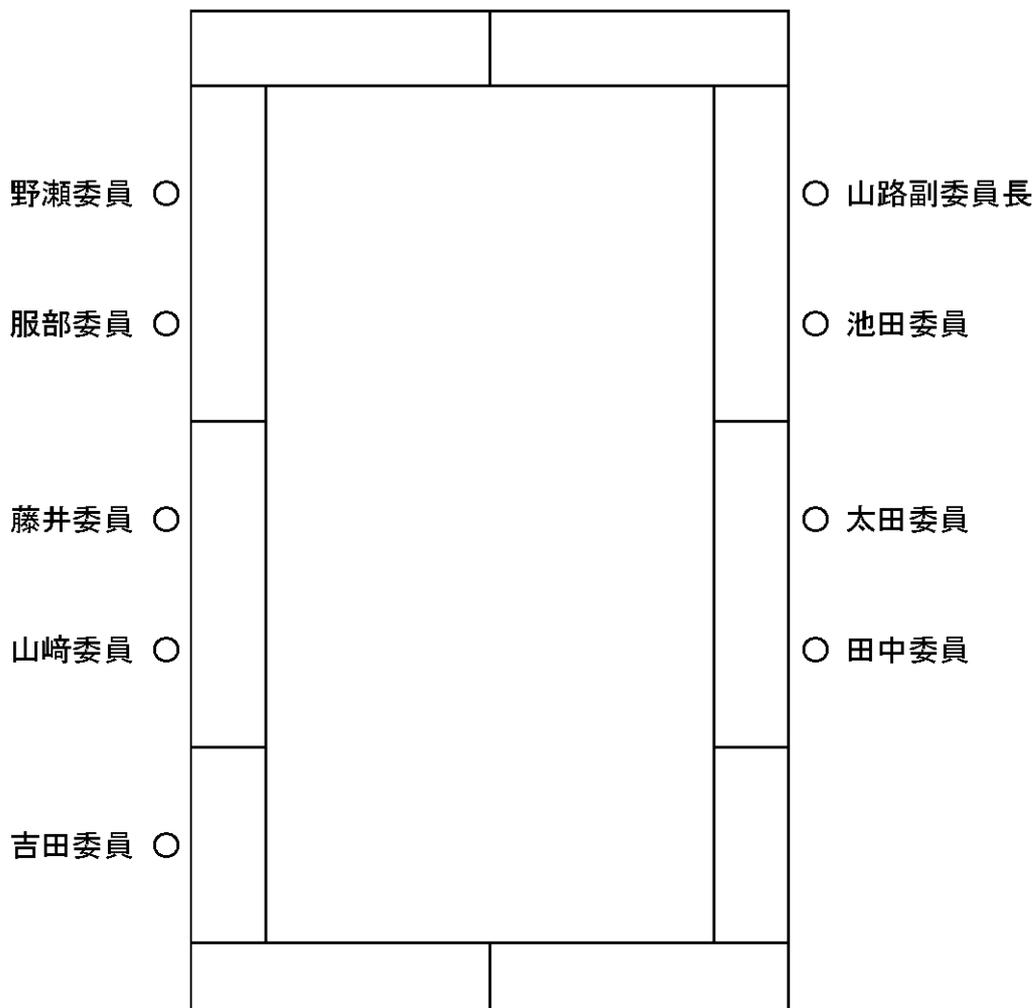
(※ 井上委員, 金剛委員, 宗田委員は御欠席)

第3回“京都をつなぐ無形文化遺産”審査会配席図

日時: 平成28年1月22日(金) 13:00~15:00

場所: ホテル本能寺5階「雁」

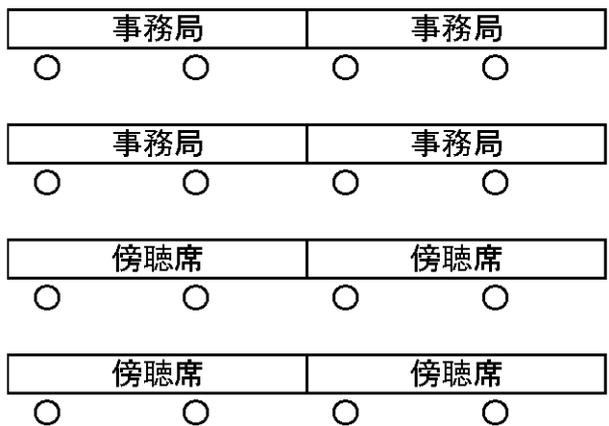
○柿野委員長



宮本課長 平竹政策監 土橋部長

出入口

出入口



“京都をつなぐ無形文化遺産”「京のきもの文化－伝統の継承と新たなきもの文化の創出」案に関する市民意見募集の結果について

1 市民意見募集の概要

(1) 募集期間

平成27年11月2日(月)～12月1日(火)

(2) 御意見数

応募者数：114人，意見総数：207件

(3) 御意見をいただいた方の属性

ア 居住地等(人)

京都市在住	京都市通勤・通学	その他	不明	合計
74	19	9	12	114

イ 年齢(人)

20歳未満	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	不明	合計
3	4	12	38	35	4	5	13	114

ウ 性別(人)

男性	女性	不明	合計
46	59	9	114

(4) 御意見の内訳

意見区分	意見数
賛同意見	62
修正等，案に関する意見	28
普及啓発等に関する意見	106
その他	11
合計	207

“京都をつなぐ無形文化遺産”「京のきもの文化―伝統の継承と新たなきもの文化」案
に関する市民意見募集の結果

1 賛同意見（62件）

No.	御意見の内容	件数
1	<ul style="list-style-type: none"> ・きもの文化の継承は大切なことであり、その声を一大生産地である京都からあげることが有意義である。 ・選定により、「きもの文化」について少しでも多くの人により深く理解され、見直してもらえるのではないかと思う。 ・大変素晴らしい取組だと思う。 ・京都を国内、国外にアピールする取組の一つとしても大変意義ある取組だと思う。 	62

2 修正等、案に関する意見案に関する御意見（28件）

No.	御意見の内容	件数
2	<p>(内容を追加する御意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒留袖と色留袖の説明 ・“襲色目”とともに、十二単の説明 ・公家文化の流れを汲んだはんなりとした印象の京都らしい、京好みのきもの ・クリーニング、手入れ方法、相談先などの紹介 ・友禅流しができなくなった経緯など歴史的な流れ ・分業の職種がどのくらいのスピードでなくなっているのか ・色々な伝統技術が込められていること ・きもの種類等として、花嫁衣裳、色留袖、紬、ウール、綿、甚平、道行コート、雨コート、防寒着、羽織、(十徳、黒紋付き、羽織)、京袋帯、洒落帯、作り帯、ひっつけ帯、女性の兵児帯、肌襦袢、襦袢、腰巻、肩掛け、ショール、手袋、刺繍の種類、染の種類、帯の結び方の種類の説明 ・浴衣 ・きものを着る季節 ・優れた技術を持つ職人が、食べられる仕事にする必要性 ・世界的にも高い水準の技術で、生地を買い付ける姿も見られるなど、海外からの注目度 	9

3	(表記の修正の御意見) <ul style="list-style-type: none"> ・きものを支えるまちは、もう少し広い範囲で示した方がよい。 ・「色無地」と「小紋」は、お洒落着・遊び着に分類した方がよいのでは。 ・京縫の刺繍は、復元できないものも含めると15種より多い。 ・和装織物という言葉遣いは、違和感がある。 ・西陣の街並みは、路地が特徴ではない。 ・かけ衿に対する表記は、衿ではなく地衿ではないか。 ・工程の文字、訪問着と付下げの柄の違いが分かりにくい。 	5
4	もう少し掘り下げた説明がある方が、興味がわく。	2
5	もう少し写真等があると、より理解しやすい。	2
6	御仕立ての作業も国産で賄えるように縫う技術も守ってほしい。	2
7	どう全国の産地とつながっているのかが分かりづらい。ゆくゆくは全国のきもの文化や着方のとりまとめをしていただけたら嬉しい。	2
8	文化財としてでなく、生活文化として幅広く位置付けてほしい。	1
9	後継者の育成や地場産業の擁護のあり方などを、もう少し強く訴えていくべき。	1
10	きものを民族衣装の括りにすると普段、着用しないイメージが強い。京友禅、西陣織も、ハレの日用となり、提言の仕方に偏りがあるように感じる。	1
11	きもの文化への応援が感じられない。	1
12	どの辺りが新たなきもの文化の創出なのか、いまひとつ分からない。	1
13	何を残すかが難しい。	1
	合計	28

3 普及啓発等に関する御意見（106件）

No.	御意見の内容	件数
14	(教育や知識の普及に関する御意見) <ul style="list-style-type: none"> ・学校で着付けの授業を取り入れる。 ・子どもの頃からきものを着て楽しい体験を。特殊なものではなく、日常生活で着る意識を育てる。 ・親子で参加できる着付け体験授業があるとよい。 ・企業の福利厚生で着付けを学ぶことができればよい。 ・無料職業訓練に「着付け教室」を加える。 ・きものに関する疑問に回答してもらえるコーナーを公的機関で作る。 	22

	<ul style="list-style-type: none"> ・TPOに合わせた着方，図柄や文様の意味，仕草や振る舞い，工程等を伝える。 ・時代物の映画・TVなど見せる。 	
15	<p>(新たなきもの，着やすさに関する御意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きものの変遷があったように，きもの型や着方を変えるべき。 ・着付けも大変だし，簡単にクリーニングできず，コストもかかる。気軽に装えるよう関係者等が工夫し，身近なものになることを願う。 ・着やすいきものが増えると嬉しい。 ・ポリエステルで安価で着やすい商品。 ・チャックやポケットを付けて楽しんでいる。 ・よさこい踊りの衣装が，伝統の柄ゆきを使いつつ，簡単に着られるけれど繊細で良いと思った。 	10
16	<p>(価格に関する御意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初心者向けに手頃な価格できものが手に入るようになれば。きもの良さをすることで，高価なきものも生まれる。 ・もっと価格の明瞭化が必要だと思う。 ・長年着続けることができるからこそ高いものを買う値打ちがあるが，近年では着る機会が減って何度も着ない。貰い手もなかなか見つからないので，きもの販売店できものを買取りして別の人に着てもらえるサービスを導入する。 ・洋服くらいの価格に。 ・流通によって高額になる。 ・手頃なものから本格的なものまで総合モールの販売する。 ・古着を活用する。 	9
17	<p>(イベントに関する御意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きものを着て出かける色々な行事やイベントをやってほしい。 ・独身女性に限らないフォーマルきものとして定着すれば振袖も買うと思う。誰もが振袖で参加するイベントをしてほしい。 ・ブログ，Facebook，インスタグラムの人気投稿をチェックし，きもの好きのイベントを開催する。 ・庶民も気軽に安心して手が届くきもの販売等を行う場の提供をお願いしたい。 ・あらゆるターゲットを想定した多種多様なイベントを高頻度で実施するのが理想である。 	9

18	<p>(広報、情報提供に関する御意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・更なる広報活動が必要である。 ・高級品だけではないことを知ってもらいたい。 ・素晴らしい技術、技法を世界に発信し、きものの維持継承を。 ・もっと悉皆屋関係の情報が欲しい。手入れが分からないからきものに手を出せない人も多い。 ・生活の中のきものの情報を、多様に提示していく取組を期待する。 	9
19	<p>(きもの着用の特典に関する御意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きものだと得ることがあるとよい。 ・毎月〇日など、きもの着用者に無料や割引などの特典を付けてはどうか。 ・きもの着用者の優待施設を全市に拡大し、通年にすべき。 	7
20	<p>(生産基盤、技術の維持継承に関する御意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「京のきもの文化」を引き継いでいくためには、産業の維持が不可欠であり、下支えに行政の支援を注力すべき。 ・市が職人を雇って残さないと、一工程でも廃業すると本物が作れない。 ・流通業界の人件費率より、職人に手厚いシステムが必要。 ・きものに関わる仕事を探している方とマッチングしやすい環境を期待。 	6
21	<p>(伝統の継承に関する御意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまで継承されてきた伝統的なきもの文化が損なわれることのないようにしてほしい。 ・商業主義先行ではなく、「正しいきもの文化」に十分配慮してほしい。 ・新たなきものに懸念を感じる。安っぽいデザインと色の大量生産のきものが大勢を占め、育まれてきた美意識や心が失われる。伝統の「型」と新たなスタイルの提示は、表裏一体に行われるべき。 	5
22	<p>(関係者等の着用に関する御意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・業界の方、家族の方も、普段から着て出かけて、街にきもの姿が見られればもっと気楽にきものを着る人が出てくると思う。 ・市長はじめ担当の方にも着ていただき、実体験を通じて広めてほしい。 ・駅案内、デパート、ホテル、いろいろな窓口、案内役など、きもの姿を制服化したら素敵だと思う。 ・京都人がもつきものを着る機会を増やすことも大切。 	4
23	<p>(関連分野への展開に関する御意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・直接関わるだけでなく、季節ごとの行事やくらしなど、日本文化全般を、きものを通して伝えてほしい。 	3

	<ul style="list-style-type: none"> ・町家も京都の特徴であり、維持・継承につながる取組も検討してほしい。 ・茶道、華道などの伝統文化へ取組が進めばよいと思う。 	
24	(きもののレンタルに関する御意見) 観光客等がきもので散策される場面をよく見かけるが、もう少し上質なものを提供できないものかと残念に思う。本物を体感し、きものを好きと言ってもらいたい。	2
25	きものを知れば知るほどプロの粋を結集した美術品のように思える。この素晴らしい反物を、ソファの生地、カーテン、ベッドカバー等、着ることに限定せずに世界に知ってもらったら、ゴージャスで上品な日本ブランドができるのではないか。	1
26	色々なきものを買わずに着たい。料金はある程度高くても、良いきものを着て、脱いで帰れる拠点があればもっと着ると思う。	1
27	安価で着付けてもらえるような施設があればよいと思う。	1
28	きものを着ている人を陰で「常識知らない」と言うのをよく聞く。京都人の意識改革を。	1
29	きものの購入費助成等の仕掛けが必要。	1
30	各種の取組を行政・産学一体となって様々な分野で推し進めるべき。	1
31	あらゆる分野のきもの関係者と消費者等による「きもの文化人会議」を開催して難題の対策を考え、実行する。	1
32	きもの文化について広くアンケート等で意見を聞いてはどうか。	1
33	東京オリンピックに向け、京都の特徴を打ち出すべき。「きもの特区」や「伝統産業特区」「伝統文化特区」などきものと文化を結びつける取組が必要。	1
34	イベントや割引制度、着付けサービスやレンタルサービスにより、気軽に着ることができて身近なものになればよいと思う。	1
35	経済的側面ばかりではなく、歴史考証をもとに文化的側面にも力を入れた活動をお願いします。	1
36	儀礼のみではなく、普段着のきものオシャレも大切。	1
37	様々な行事での伝統の技を目にする環境を整えてこそ、和装文化の発展につながる。	1
38	何だか難しそうという若者について、潜在的需要を引き出す普及啓発を進めてほしい。	1
39	選定によるメリット、デメリットが見えにくい。	1
40	選定するだけで終わらず、選定後に何をすることが大事。	1

41	無形文化遺産の「遺産」という言葉には、違和感がある。	1
42	地蔵盆以外は業界の意図が垣間見えるよう。	1
43	神社，固有文化などの発展に力を入れ，より一層活性化する必要がある。	1
44	関係者に意見を書いてもらってはどうか。	1
	合計	106

4 その他（11件）

No.	御意見の内容	件数
45	（年齢的に）ピンクの花柄の洋服を着ようとは思わないが，桜のきもので出掛けてみたい。季節を楽しんだり，小物との組合せを考えたりときものは頭を回転させてくれる。	1
46	祖母のきものが古びずモダンに，サイズを変えずに装えることが，最大のきものの魅力である。	1
47	歳を重ねる度にきもの姿を振り返るようになった。近年，時々きもので出掛ける機会を楽しんでいる。	1
48	50年前は消費者に見る目があり，競って良い作品を作ったが，今は買う側はもちろん売る側も呉服のことを知らない方々が営み，利己に走っている。インクジェットの作品を安く販売するのは賛成だが，高額で出回っている。	1
49	きものに着替えられたらよいと思う。	1
50	きものはチラリと見ても美しい。	1
51	きもの文化を勉強していきたい。	1
52	案に対する御意見以外のもの	4
	合計	11

前回審査会からの選定案の主な変更について

審査会委員及び市民からの御意見	変更箇所	変更内容
「京都は山紫水明の・・・」の部分は、表現が大仰すぎるのではないか。	P1 L6 選定にあたって	〔削除〕 京都は、山紫水明の自然、1200年を超える歴史の中で人々が築いた景観が相俟って、美しいまちを形成している。そして、京都の人々は、 花を愛で、鳥の声を聞き、風を感じ、月を眺め、 自然に対する畏敬と親しみの念を持ち、四季の移ろいを大切にしながら、豊かな文化を創造してきた。
振袖は近代、付下やアンサンブルは戦後のものであり、今も変化は続いている。	P1 L25 選定にあたって	〔変更〕 このようなきもの文化の発展は、最大の生産地、集散地としての強固な産業基盤の支えによるものであるが、 により 発展し続けているが、近年、その基盤が揺らいでいる。生活様式の変化などにより、きものの消費は落ち込み、後継者の不足で貴重な技術が年々失われている。 るなど、その基盤が揺らいでいる。
民族衣装を着る習慣の残る国が希少というのはいすぎではないか。	P2 L10 選定にあたって	〔変更〕 現代において、我が国のように日常生活の中で民族衣装を着る習慣の残る国は、世界的に見ても希少な存在となっている。 我が国には日常的に民族衣装であるきものを着る習慣が今も残り、また民族衣装を大切にしようという動きが広がっている。

<p>今のきものができあがった寛永文化あたりまで記述を広げる。</p>	<p>P3 L14 きもの成り立ち</p>	<p>〔追加〕 江戸前期には、描き絵染が生まれ、染織の各種技法が発達し、今日に通じる技法がほぼ確立された。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・色々なサービス，着る機会との組み合わせを提案していくホールプロダクトの考え方が必要である。 ・クリーニングや仕立て直しなどアフターメンテナンスがわかりにくい。 	<p>P4 L14 現状と課題</p>	<p>〔追加〕 きものと組み合わせた魅力的なサービスやイベントの展開など着用機会の創出とともに、きものの似合う場面とふさわしい着こなしの提案，製造工程の公開，購入後のサポートなど，より具体的でわかりやすい消費者への情報提供が必要となっている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・きものスタイルは画一だが，その中で模様や，帯や小物の組合せで見せる文化である。 ・身体を包むのがエレガントである。 ・平面に表現するものである。 ・帯の結び方などフレキシブルで奥行きを持っている。 	<p>P5 L1 きもの魅力</p>	<p>〔追加〕 平面的で画一的ともいわれる様式の中に本質の美を際立たせようとするきもの美しさには，日本のこころが感じられる。</p>
<p>京都は着道楽といわれるが，きものを生かして最後まで使いきる。</p>	<p>P5 L15 きものを通して磨かれるところ</p>	<p>〔変更〕 破損した場合も，繕ったり，端切れをつなぎ合わせたり，裏地や帯にしたり，工夫して夫事に扱われた長く愛用した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・祭，仏教，神事，能の装束など，装束文化について書いた方が良い。 ・能装束には，縫箔，刺繍，錦，唐織などの技術があり，宮廷が最高の技術を入れたものである。 ・京都のきもの文化に厚みを持たせる存在である。 	<p>P6 L8 きもの文化が育まれた背景</p>	<p>〔追加〕 また，京都は，宮廷，宗教，能，祭などの装束の生産の中心であり，これらの技が，きもの文化に厚みを持たせる存在となっている。</p>
<p>京都がミラノやリヨンと匹敵する工業都市であるのはきもののおかげだということを書く。</p>	<p>P6 L20 京都のきもの歴史</p>	<p>〔変更〕 きもの流行は，きものをはじめ，世界に誇るものづくり都市である京都から流行は発信された。</p>

京縫の刺繍は、復元できないものも含めると15種より多い。	P8 L3 きものを支える技・ひと	〔変更〕 絹や麻の織物に絹糸、金糸、銀糸などを用いた刺繍は15種類以上に及ぶ多種多様な技法が使われている。
御仕立ての作業も国産で賄えるように縫う技術も守ってほしい。	P8 L23 分業制	〔追加〕 反物で出荷されたものを、目的や体型に合わせ仕立てるのが基本である。
きものを支えるまちは、もう少し広い範囲で示した方がよい。	P10 L14 きものを支えるまち	〔変更〕 ○ 西陣界限 ○ 堀川界限 ○ 室町、新町界限
和装織物という言葉遣いは、違和感がある。	P 10 L15 きものを支えるまち	〔変更〕 西陣織のまちであり、西陣は日本最大の和装織物日本を代表するきもの生産地である。
西陣の街並みは、路地が特徴ではない。	P10 L18 きものを支えるまち	〔削除〕 袋小路となった細い路地の両側に十数軒の家が並び、ひとつの独立した家の門構えのようにになっているのが特徴である。
<ul style="list-style-type: none"> ・庶民の麻や綿のきものに関する記述がない。 ・庶民は、ハレの日は絹も着るが、普段は麻や綿を着ていた。 ・日常着としては木綿が愛用された。昭和初期まで、市内中心部に大きな木綿問屋があった。 ・洛外の女性の仕事着として大原女など地域特有の風俗がある。 ・普段着のきものは昭和40年ごろには廃れていく。最近はまだ復活の兆しがあるということだろう。 ・普段、着用しないイメージが強い。提言の仕方に偏りがあるように感じる。 	P11 L4 道具類， 原材料	〔追加〕 ○綿糸 綿花から紡ぎ上げた糸。 ○麻糸 麻を原料として製造した糸。日本では古くから大麻、苧麻（ちよま）を紡いで麻布を作ったが、明治以後、亜麻、黄麻（こうま）が入る。

<p>公家文化の流れを汲んだはんなりとした印象の京都らしい、京好みのきものを追加した方がよい。</p>	<p>P12 L7 きものを着る人、愛でる人</p>	<p>〔追加〕 京都では、宮廷文化の流れを汲み、落ち着いた色彩の中にも華やかさの感じられる、はんなりとした印象のきものが好まれ、きもの、帯、小物の合わせ方もめりはりをつける江戸好みに対し、馴染みの良いのが京好みといわれる。</p>
<p>(再掲) ・庶民の麻や綿のきものに関する記述がない。 ・庶民は、ハレの日は絹も着るが、普段は麻や綿を着ていた。 ・日常着としては木綿が愛用された。昭和初期まで、市内中心部に大きな木綿問屋があった。 ・洛外の女性の仕事着として大原女など地域特有の風俗がある。 ・普段着のきものは昭和40年ごろには廃れていく。最近はまだ復活の兆しがあるということだろう。 ・普段、着用しないイメージが強い。提言の仕方に偏りがあるように感じる。</p>	<p>P12 L11 項目追加</p>	<p>〔追加〕 「きものと日々の暮らし」 現在、きものは晴れ着やお洒落着として着用されることが多くなったが、昭和の半ばまで、きものは日々の暮らしの衣服であった。素材は、木綿などが多く用いられ、屑繭や不良繭からひいた糸で織った銘仙(めいせん)、ウールのきものなども流行した。古着の流通も盛んで、端切れやボロにいたるまで扱われた。 女性のきものは、襷をかけたり、裾をからげたり、割烹着を着たり、工夫しながら着用された。男性のきものは、洋服が公の場で着用するものとして導入されたため、家庭の中で丹前や長着と羽織、浴衣や甚平でくつろぐかたちが戦後まで続いた。 野良着など仕事着としてのきものは、身体を保護し、動きやすい工夫がされている。大原女をはじめ、その衣装には地域性やお洒落の特徴も見られる。</p>

<p>(再掲)</p> <p>・祭, 仏教, 神事, 能の装束など, 装束文化について書いた方がよい。</p> <p>・能装束には, 縫箔, 刺繍, 錦, 唐織などの技術があり, 宮廷が最高の技術を入れたものである。</p> <p>・京都のきもの文化に厚みを持たせる存在である。</p>	<p>P13 L3</p> <p>きものと 伝統文化</p>	<p>[追加]</p> <p>○ 装束</p> <p>唐織 (からおり), 縫箔 (ぬいはく) などの高度な技術が駆使された豪華絢爛な能装束, 法衣や神職の装束, 祭の装束などの存在は, きもの文化を重層的なものにしている。</p>
<p>“襲色目”とともに, 十二単の説明を追加した方がよい。</p>	<p>P13 L18</p> <p>きものと 季節, 風物</p>	<p>[追加]</p> <p>十二単に代表される女性の重ね着の色合わせである「襲色目(かさねいろめ)」は, 色の組み合わせで自然の色を表現している。</p>
<p>インターネットの普及でユーザーが互いに情報をやりとりするようになり, ケのきものも伸び, 着方が自由になっている。</p>	<p>P16 L21</p> <p>新たなきもの文化の創出</p>	<p>[追加]</p> <p>インターネットの普及により, 消費者同士の情報交換や交流も盛んになった。</p>
<p>黒留袖と色留袖の説明を追加した方がよい。</p>	<p>P17 L12</p> <p>きもの, 帯の種類 と小物</p>	<p>[追加]</p> <p>黒地で染め抜きの五つ紋をつけ, 前見頃に絵模様を施したきもので, 既婚女性の礼装として用いられる黒留袖, 色地に三つまたは一つ紋で絵模様のある色留袖がある。</p>
<p>「色無地」と「小紋」は, お洒落着・遊び着に分類した方がよいのでは。</p>	<p>P19 L10</p> <p>きもの, 帯の種類 と小物</p>	<p>[削除]</p> <p>(表中 女性の略礼装欄)</p> <p>訪問着 紋付色無地 付下げ 色無地 小紋</p>

※ その他

- ・公益財団法人京都和装産業振興財団, 西陣織工業組合, 京友禅協同組合連合会, 公益社団法人日本図案家協会の御協力により画像掲載
- ・ふりがなを追加

(案)

京都をつなぐ無形文化遺産

「京のきもの文化」

— 伝統の継承と新たなきもの文化の創出

選定にあたって	1
きものの成り立ちと現状	3
きものの魅力	4
京都のきもの文化を支える技・ひと・道具	6
きものと和の文化	12
伝統の継承と新たなきもの文化の創出	16
(参考) きものの種類等	17

画像協力：公益財団法人京都和装産業振興財団
西陣織工業組合
京友禅協同組合連合会
公益社団法人日本図案家協会

選定にあたって

きものは長い歴史の中で受け継がれてきた、日本が世界に誇る民族衣装である。「きもの」は、「洋服」に対する言葉として、「和服」を指して用いられ、今では「kimono」として国際的に通用する衣装になっており、外国の方がきものを買求めることも少なくない。

京都は、山紫水明の自然、1200年を超える歴史の中で人々が築いた景観が相俟って、美しいまちを形成している。そして、京都の人々は、自然に対する畏敬と親しみの念を持ち、四季の移ろいを大切にしながら、豊かな文化を創造してきた。きもの文化は、このような京都の自然、まち、人々により育まれた。

また、きものは、茶道、華道、香道、能・狂言、日本舞踊といった、我が国固有の文化とともに、発展してきた。現在でも、京都には、多くの寺社の本山・本社、芸道や芸能の家元、花街、町家など、「和」の文化の源泉が存在しており、京都は日本のきもの文化の中心となっている。

その歴史は、平安時代からの宮廷を中心とした「みやびの文化」の広がりとともに、様々な技術・技法・意匠を用いた手工業が発達、集積してきた。なかでも、京都の伝統産業を代表する「西陣織」は、平安京に設けられた「織部司」がもととなっており、その高い技術は世界的に認められている。「京友禅」は染色技術が発達した江戸時代に創案され、その華麗な意匠は、憧れとなっている。京都のきもの生産工程は、多品種少量の高級品生産に応えられるよう、分業が著しく発展しているのが特徴である。

京都では、歴史や文化を背景に、繊細な職人の技による、形、色、模様のすべてに和の文化の粋が投影された、日本の美意識の集大成ともいえるべき、伝統と格式を備えたきものが、維持継承されている。

このようなきもの文化は、最大の生産地、集散地としての強固な産業基盤の支えにより発展し続けているが、近年、生活様式の変化などにより、きもの消費は落ち込み、後継者の不足で貴重な技術が年々失われるなど、その基盤が揺らいでいる。

一方、和の文化を再評価する気運の高まりとともに、和のエッセンスを取り入れつつも、格式にこだわりすぎず、現代的なファッション感覚で気軽にきものを楽しみたいというニーズが高まっている。そして、京都は、きもの文化の中心として、こうしたニーズに応える新たなきもの文化を創出し、全国へ発信していく役割が期待されている。

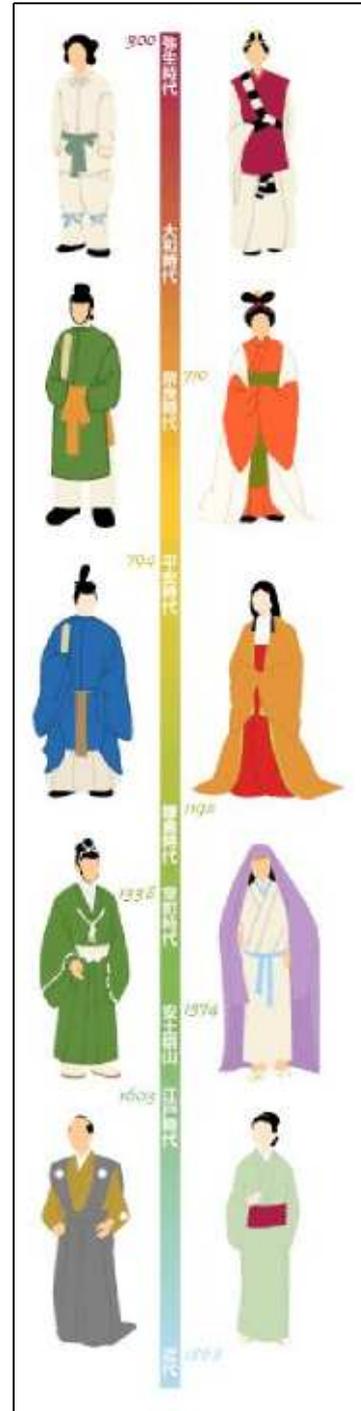
「伝統の継承」と「新たなきもの文化の創出」、京都には二つの面が求められているが、伝統を守りつなぎながら、時代の変化に即して新たな文化を創出し、両者の共生を図るなかで、懐の深い重層的な文化を作り上げてきた姿こそが、京都のきもの文化である。

我が国には日常的に民族衣装であるきものを着る習慣が今も残り、また民族衣装を大切にしようという動きが広がっている。グローバル化が進んだ現代において、海外の人々をも魅了する、四季の変化に富んだ豊かな風土に育まれた独自の感性が凝縮された、和の文化を象徴する存在としてのきものは、市民の誇りであり、守り継がなければならない我が国の貴重な財産である。

京都、そして日本になくってはならないきもの文化が、悠久の歴史が育んできた優れた美意識、伝統の神髄を継承しながらも、現代の感性で意匠や着こなしを変えつつ、未来にわたって市民生活の中で愛され続けていくよう「京のきもの文化 ―伝統の継承と新たなきもの文化の創出」を“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定する。

きものの成り立ちと現状

項目	内容・特徴
<p>きものの成り立ち</p>	<p>きものの歴史は、縄文時代、一枚の布を巻きつけた巻布衣（かんぷい）、布の真ん中を切って頭を出す貫頭衣（かんとうい）に始まる。大陸文化の影響を受けて筒袖のものが現れ、平安時代には日本の気候風土に合わせ、身幅や袖幅がゆったりとした男性の束帯、女性の十二単が貴族の装束となる。武家社会に移ると、動きやすさが重視されて袖丈の短い小袖が主流となった。室町時代頃の小袖は、袖幅が狭く、お端折りのない実用的な衣服であった。桃山時代に豪壮華麗な文化を背景に小袖は派手になる。江戸前期には、描き絵染が生まれ、染織の各種技法が発達し、今日に通じる技法がほぼ確立された。また、江戸時代には、帯の結び方、髪形、小物の細工なども凝ったものが生み出されていった。</p> <p>明治以降は、洋装が入ってきて、きものの柄も洋風のものが見られるようになった。生活習慣も西洋スタイルに次第に変化するなか、きものは大切な儀式やぜいたくを楽しむ象徴となっていった。</p> <p>「きもの」という名称は、桃山時代に、小袖を「着るもの」、「きもの」と呼ぶ例が見られ、公家・武家階級が身に着けていた大きな袖口を持つ「大袖、広袖」が着られなくなると、明治時代には和装を表す言葉となった。今では「kimono」は、国際的に通用する言葉になっている。</p>



<p>現状と課題</p>	<p>戦後、たんすが空っぽの状態から人々はきものを買求め、高度経済成長期とともに、きもの生産量は飛躍的に伸びた。しかし、昭和50年代に入ると、日常の生活風景からきもの姿が消え、大衆呉服の生産量が大幅に減少していった。やがて、好調を保っていた晴れ着や式服など高級呉服の売れ行きも、バブル崩壊後は減少していく。</p> <p>消費の低迷による最も大きな課題は、生産地が打撃を受け、きもの文化を支えるものづくりの力が落ちていることである。生産量の減少は、きものづくりの根幹である分業制の維持を困難にし、後継者の不足により失われた技術もある。古い能装束などは二度と同様の品質で生産できないものがあるという。また、道具や原材料の製造事業者の廃業も広がっている。</p> <p>一方、消費者においては、購入や着用することが少なくなるに伴い、品質や価格、場面に合わせたきもの着方、帯や小物の組み合わせなどの知識を習得する機会も減少し、わからないので敬遠するという悪循環に陥っている。そのため、きものと組み合わせた魅力的なサービスやイベントの展開など着用機会の創出とともに、きもの似合う場面とふさわしい着こなしの提案、製造工程の公開、購入後のサポートなど、より具体的でわかりやすい消費者への情報提供が必要となっている。</p>
<p>課題の解決に向けた取組</p>	<p>京都市では、行政ときもの関連業界が連携・協力し、きもの姿の方を対象としたコンサートなどのイベントの開催や、きもの展示会の実施、一定期間交通機関の利用や施設の入場が無料になるなど、きもの魅力をPRし、着用機会を創出する取組を積極的に推進している。また、きもの着用者には割引や粗品プレゼント等の特典が受けられたり、タクシーの料金が割引になるなど、民間企業における自主的な取組も行われている。</p> <p>さらに、市立中学校における浴衣の着付け体験授業の実施や、小学生を対象とした「ジュニア京都検定」のテキストブックにおいて、きものを取り上げるなど、教育における取組の充実も図っている。</p>

きもの魅力

項目	内容・特徴
<p>きもの魅力</p>	<p>生活様式が変化するなか、着用機会は少なくなったが、きもの美しさや素晴らしさは再評価されている。</p> <p>きもの魅力は、まず、四季を持つ日本の美意識が表現され、長い歴史の中で磨かれた文様や意匠などが奥深い和の文化を表している点である。</p>

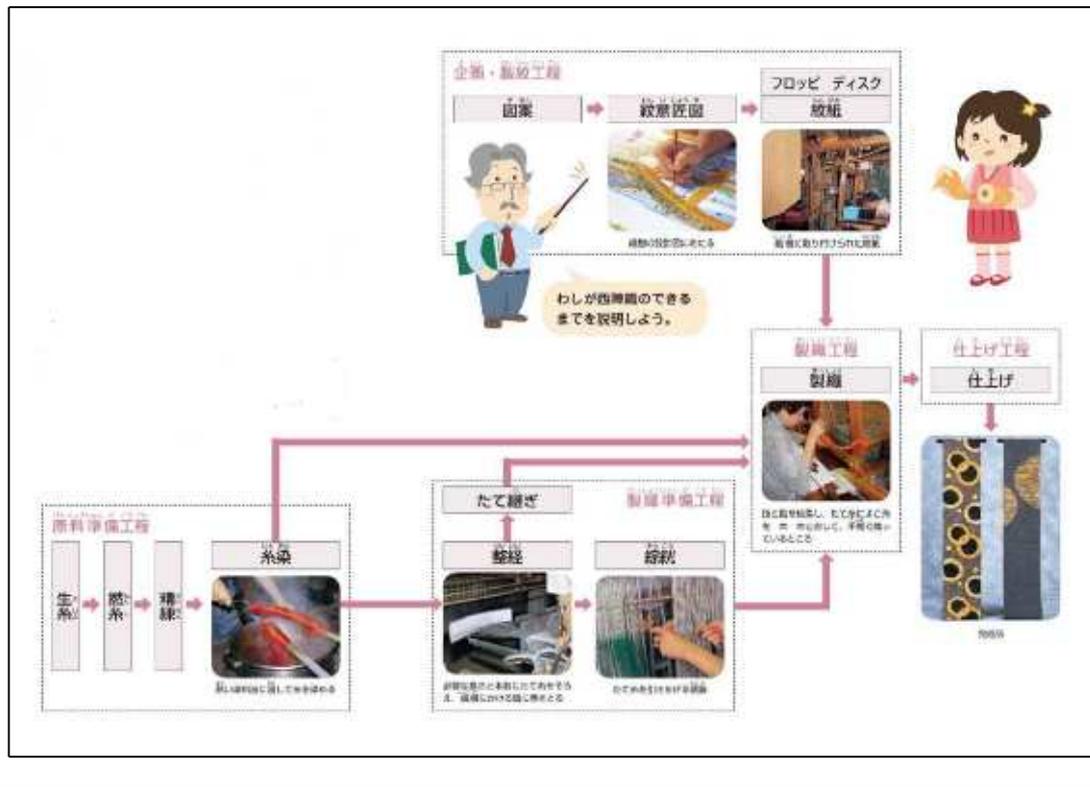
	<p>平面的で画一的ともいわれる様式の中に本質の美を際立たせようとするきものの美しさには、日本のこころが感じられる。</p> <p>きものは、日本人の体型の長所を活かした、日本人に似合う装いでもあり、きものと、帯や小物の組み合わせ次第で趣が変わり、幅広いお洒落が楽しめる魅力も大きい。</p> <p>男性のきものにおいては、羽裏（はうら）や襦袢（じゅばん）、しゃれ紋など、隠れたお洒落が楽しみの一つである。</p> <p>高価な印象もあるが、流行が少なく、多少の体型の変化にかかわらず、長く着ることができ、ほどけば一枚の反物に戻り、多様な仕立て直しが可能のため、大切に保管して、世代を越えて子や孫へ受け継がれるものも多い。</p> <p>きものを着ることで注目されること、周囲の目を楽しませることなども魅力の一つである。</p>
<p>きものを 通して 磨かれる こころ</p>	<p>きものは、長く着るものであり、親から子へ大切に引き継がれる。そのため、家庭では、きものを着る時には手を洗い、虫がつかないようにきっちりと畳んで保管し、季節ごとの虫干しなどに気を配る。破損した場合も、繕ったり、端切れをつなぎ合わせたり、裏地や帯にしたり、工夫して長く愛用した。こうした家庭の営みの中で、ものを大切に扱うことを子どもたちは自然に学んでいった。ものを大切にする心は、現代のエコロジーの精神にも通じる。</p> <p>きものを着ると、自然と背筋が伸びて、美しい所作が身についてくる。動きが制約されるからこそ、周りに気を配る心遣いが生まれてくる。</p> <p>京都には、普段はしまつしているが、着るものにこだわり、特別な晴れの日に質のいいきものを着る気風があるが、これは、相手をもてなすために着るという考え方、おもてなしのこころに通じている。</p>
<p>きものの 映えるまち</p>	<p>きものの映える日本らしい町並みをきもの姿で歩くことは、非日常を体験することにつながり、観光の楽しみの一つとなる。</p> <p>きものの映えるまちとして、代表的な観光地である京都では、国内外から訪れる旅行者等がきものや浴衣を着て、祭などの行事に参加したり、社寺等を散策するなどの楽しみ方も定着してきている。</p>

京都のきもの文化を支える技・ひと・道具

項目	内容・特徴
きもの文化が育まれた背景	<p>三方を雄大な山々に囲まれ、鴨川などの豊かな水に恵まれ、寒暖の差の大きい気候のもと、四季が鮮やかに移ろいゆく京都では、自然との共生を大切にしてきた。また、平安京遷都以来、永きにわたり都が置かれ、文化の中心地として栄えるなかで、季節感やおもてなしの心、本物へのこだわりといった精神文化が生まれ、きもの文化に浸透していった。</p> <p>また、京都は、宮廷、宗教、能、祭などの装束の生産の中心であり、これらの技が、きもの文化に厚みを持たせる存在となっている。</p>
京都のきもの歴史	<p>平安京への遷都が行われると、朝廷では絹織物技術を受け継ぐ工人たちを、織部司（おりべのつかさ）という役所のもとに組織して、綾・錦などの高級織物を生産させ、貴族の彩色豊かな衣服がつくられていった。鎌倉時代に入ると、武士の天下となり専従職人たちは解雇されるが、大舎人町（おおとねりまち）というところに集まり、大陸から伝えられる新しい技術を取り入れながら、生産を続けた。</p> <p>応仁の乱で京都の街は焼け、職人は各地に四散するが、戦乱が終わると戻った職人が、西軍の陣地跡で織物業を再開し、まちは「西陣」と呼ばれるようになった。江戸時代には、小袖の発展とともに、きものを留める紐であった帯が装飾的となり、存在感を示すようになった。</p> <p>きものをはじめ、世界に誇るものづくり都市である京都から流行は発信された。高級呉服商雁金（かりがね）屋に生まれた尾形光琳（おがたこうりん）は、元禄時代を代表する絵師であるとともに、きものデザイナーとしても活躍した。また、江戸時代中期には、京都で人気のあった扇絵師宮崎友禅齋（みやざきゆうぜんさい）も、呉服商からの依頼を受けて、きもの図案のデザイナーとして活躍し、自由で斬新なデザインの友禅染は、大流行した。</p> <p>当時の意匠、織技術、染色技術などは圧倒的に京都が突出しており、その流行は上方から江戸へ伝播し、やがて全国へと広がった。また、街道の整備や経済の発展により京都と地方の取引が盛んになるにつれ、全国各地に技術が伝わった。</p> <p>尾形光琳のほか、竹内栖鳳（たけうちせいほう）、堂本印象（どうもといんしょう）ら京都を代表する画家たちが友禅の下絵を描くなど、絵画的な美しさが磨かれていった。</p>

<p>きものを 支える 技・ひと</p>	<p>(重要無形文化財保持者等)</p> <p>有職織物、友禅、羅（ら）、刺繍などの技術が重要無形文化財とされており、その高度な技を体得し、精通されている方が、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されている。</p> <p>また、染織の技は、祇園祭等における文化財を保存する技術（選定保存技術）としても選定されており、京都の祭礼文化を豊かにしている。</p> <p>(伝統産業)</p> <p>伝統的な技術と技法で、日本の文化や生活に結びついている製品を作り出す産業として、京都市では伝統産業74品目を指定しており、このうちの多くは、きものに関わる産業である。</p> <p>○ 西陣織</p> <p>5～6世紀頃、豪族・秦氏が養蚕と織物をはじめたことに起源し、15世紀応仁の乱の後に基盤を築く。西陣織は極めて多種多様で、綴、経錦、緯錦、緞子（どんす）、朱珍（しゅちん）、紹巴（しょうは）、風通（ふうつう）、縋り織、本しば織、ピロード、緋織、紬等の品種があり、多色の糸を使用し絢爛豪華な糸使い模様の精緻さを特色とする。</p> <p>○ 京鹿の子絞</p> <p>10世紀初頭の宮内での絞り染めを起源とし、17世紀には「かのこ」の名称で広く愛用される。絹織物の生地、多種のくくり技法と、染め分け技法を駆使した複雑多彩な模様染めである。</p> <p>○ 京友禅</p> <p>古くから伝わる染色技法を、17世紀後半に宮崎友禅齋が集大成したことからこの名がついた。現在、高度な技法を受け継ぐ手描友禅と明治初期に創案された型友禅がある。型友禅の出現は友禅を庶民のものにした。</p> <p>○ 京小紋</p> <p>起源は17世紀初頭で江戸時代の武士の袴に端を発している。明治初期より単色から彩色へと変化しながら友禅染と互いに刺激しあって技法を向上させてきた。色柄は、落ち着きのある渋さが特徴である。</p> <p>○ 京くみひも</p> <p>平安時代が起源とされ、帯締、羽織ひもを主に根付ひもなど80種近くの種類を生産。丸台、角台など幾つもの組台を使う手仕事で、古都の文化に培われた雅な京工芸の一つである。</p>
------------------------------	--

西陣織の主な工程



京友禅の主な工程



(出典：わたしたちの伝統産業／発行：京都市，京都市教育委員会)

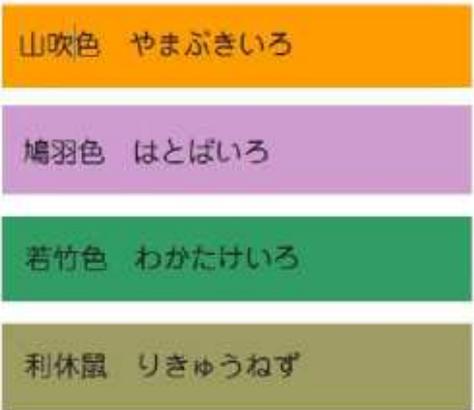
	<p>近年は、一つの工房で複数の工程を担う生産体制を導入しているところもある。</p> <p>また、新たな製織技術、インクジェット捺染技術、紋織物関連のデータを処理するソフトウェアの開発などが進んでいるほか、ARによる情報提供や3Dプリンターによる道具製作など、新しい技術を活用する研究も始まっている。</p>
<p>きものを支えるまち</p>	<p>分業制による生産工程は、多くが職住一体型の小規模な家内工業であり、注文に応じて、各工程を担う職人が有機的関連性を持ちながら、きものを作りあげている。そのため、職人は集まってまちを形成し、まち全体が一体となって効率的にきものを生産してきた。</p> <p>また、きものは、集散地問屋、地方問屋、小売店・百貨店などの流通を経て消費者の手に届けられるが、こうした流通を担う呉服商も集まって、まちを形成している。</p> <p>○ 西陣界限</p> <p>西陣織のまちであり、日本を代表するきもの生産地である。起源は平安時代以前にまでさかのぼり、その名は、応仁の乱の後、西軍が本陣とした場所に職人が集まって織物の町を形成したことに由来する。</p> <p>織屋の家は、背の高い織機が入るため1階の天井が高く、上の階が狭い、独特の織屋建（おりやだて）である。</p> <p>○ 堀川界限</p> <p>かつては京友禅の染料を定着させるための友禅流しが、堀川や鴨川で行われており、染工場などが地域を支えてきた。</p> <p>○ 室町、新町界限</p> <p>家康の時代から始まると言われる呉服商のまちであり、江戸時代、室町界限は日本の商業の中心地として茶屋四郎二郎（ちゃやしろうじろう）や三井家、住友家、松坂屋等の店が軒をならべた。従業員は店や路地に住み、職住一体で生活をしていた。</p> <p>呉服商の町家は、奥行き長い敷地の表部分に店があり、玄関と坪庭を挟んで奥に居住部分のある表屋造り（おもてやづくり）が多い。</p> <p>格子は、京町家の特徴の一つであるが、きもの関係の町家においては、一般的に織物の色糸を選別しやすくするため、採光に考慮し、上部を空けた糸屋格子、織物格子と呼ばれる格子を持つものが多いといわれる。</p>

<p>道具類, 原材料</p>	<p>(原材料の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○絹糸 桑の葉を食べて育った蚕が繭になり，その繭を煮て取りだす。 ○綿糸 綿花から紡ぎ上げた糸。 ○麻糸 麻を原料として製造した糸。日本では古くから大麻，苧麻（ちょま）を紡いで麻布を作ったが，明治以後，亜麻，黄麻（こうま）が入る。 ○染料 明治時代以前は，紅花，藍，紫草，刈安などの草木，樹皮，木の実，虫など自然界の染料で染めていた。現在は，多くが化学染料による。 <p>(道具の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○織機 綴機，手機，力織機，ジャカードなどがある。 ○杼（ひ） 糸を巻いた管を舟形の胴部に収めたもので，経糸の間に緯糸を通す。 ○はしご 糸をずらす道具で，緋（かすり）加工に用いる。西陣で考案された独特の道具。 ○刷毛 京友禅に用いる。丸刷毛，引染用刷毛，とろ刷毛などがある。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>(杼)</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>(刷毛)</p>  </div> </div>
<p>全国との つながり</p>	<p>仙台平（せんだいひら），小千谷縮（おぢやちぢみ），加賀友禅，丹後縮緬（たごちりめん），博多織，大島紬（おおしまつむぎ）など，地域の名を冠した個性あふれる素晴らしい染織品が全国で生産されている。</p> <p>また，道具類，原材料の生産地も，全国に広がっており，きもの文化は全国各地とつながり，支え合って成り立っている。</p>

	<p>その中であって、京都は、最大の生産地、集散地、そしてきもの文化のネットワークの中心として、きもの文化を創造、継承する役割を担っている。</p>
<p>きものを着る人、愛でる人</p>	<p>京都には、着るものをはじめ、言葉、所作、住まい、食べものなどすべてにおいて美しくあらねばならないという精神が根付いている。きもの美しさは、作り手や売り手のみならず、きものを着る人、愛でる人など、きものを扱うすべての人々の手により、育まれてきた。</p> <p>京都では、宮廷文化の流れを汲み、落ち着いた色彩の中にも華やかさの感じられる、はんなりとした印象のきものが好まれ、きもの、帯、小物の合わせ方もめりはりをつける江戸好みに対し、馴染みの良いのが京好みといわれる。</p>
<p>きものと日々の暮らし</p>	<p>現在、きものは晴れ着やお洒落着として着用されることが多くなったが、昭和の半ばまで、きものは日々の暮らしの衣服であった。素材は、木綿などが多く用いられ、屑繭や不良繭からひいた糸で織った銘仙（めいせん）、ウールのきものなども流行した。古着の流通も盛んで、端切れやボロにいたるまで扱われた。</p> <p>女性のきものは、襷をかけたたり、裾をからげたり、割烹着を着たり、工夫しながら着用された。男性のきものは、洋服が公の場で着用するものとして導入されたため、家庭の中で丹前や長着と羽織、浴衣や甚平でくつろぐかたちが戦後まで続いた。</p> <p>野良着など仕事着としてのきものは、身体を保護し、動きやすい工夫がされている。大原女をはじめ、その衣装には地域性やお洒落の特徴も見られる。</p>

きものと和の文化

項目	内容・特徴
<p>きものと伝統文化</p>	<p>きものと文化、人生の節目の儀式や行事などは、密接に関わっている。</p> <p>茶道、能・狂言、日本舞踊などの文化にとって、きものは不可欠の要素であり、きものと日本の伝統文化は相互に支え合っている。</p> <p>○ 文化</p> <p>茶道、華道、香道、能、狂言、日本舞踊、花街、歌舞伎、剣道、弓道など</p> <p>○ 儀式</p> <p>宮参り、七五三、十三参り、入学式、卒業式、成人式、結婚式、葬儀など</p> <p>近年は、和婚もブームになっている。</p>

	<p>○ 行事 正月，祭など</p> <p>○ 装束 唐織（からおり），縫箔（ぬいはく）などの高度な技術が駆使された豪華絢爛な能装束，法衣や神職の装束，祭の装束などの存在は，きもの文化を重層的なものにしている。</p> <p>また，きものは，日常生活の中にあって発展し，畳や襖などの和室のしつらえ，和食などととも，日本の衣食住の文化をつくり，和の生活文化をつくってきた。</p>
<p>きものと 季節，風物</p>	<p>きものは，自然と深く関わり，季節感を大事にしてきた日本人の感覚，和の心が色濃く反映され，四季の自然を様々に写している。</p> <p>色や柄のなかに，日本特有の季節，風物を表現したものが多く見られる。</p> <p>○ 色 きものに用いられる伝統的な色の呼び名には，自然の風物を表しているものが多く，季節感が感じられる。また，茶人の千利休にちなんで，抹茶の緑色と侘び茶の雰囲気を感じていわれた利休色など，人名に由来するものもある。</p> <p>十二単に代表される女性の重ね着の色合わせである「襲色目（かさねいろめ）」は，色の組み合わせで自然の色を表現している。</p> <p>(色名の例) 鶯色，桜色，山吹色，栗色，鳩羽色，桔梗色，若竹色，利休鼠 (襲色目の例) 葵（淡青／淡紫），枯色（淡香／青），椿（蘇芳／赤）</p> 

○ 柄

きものの柄は文様といい、身近な植物や動物、自然の風景、身の回りの品々などを元にしたものが多く見られる。緋扇や御所車など雅な柄は礼装、生活に密着した柄はお洒落着などに用いられる。

(文様の例)

松竹梅、菊、楓、菖蒲、鶴、蝶、御所車、手毬、瓢箪、
観世水（かんぜみず）、青海波（せいがいは）



○ 季節のきまりごと

きものの装いには、季節による決まりごとがあり、6月と9月は単（ひとえ）、7月と8月は絹（ろ）や紗（しゃ）など透ける薄物や麻、その他の季節は袷（あわせ）を着用する。色柄も四季の風物が描かれたものなどは季節に合わせ、少し先取りで身につけるのが粋とされる。

京都の年中行事や人々の暮らしは、四季の移り変わりに応じて、細かく配分されている。一年を四季、十二月、二十四節気、十日毎の旬、七十二候に分け、それに応じた数多くの行事を行いながら、季節が移り変わっていく様を大切に見つめ、日々の無事と自然への感謝を思いながら過ごしていくのである。

四季の変化を大切にする和の文化の特質が、きもの文化の特質にも通じている。

<p>きもの由来 の言葉</p>	<p>きものは、日本人の生活に深く根差しており、日本語の中にはきものに由来する言い回しが多く息づいている。</p>	
<p>例</p>	<p>意味</p>	<p>きものの部位等</p>
<p>襟を正す</p>	<p>乱れた衣服を整える。事に当たって、気持ちを引き締める。</p>	<p>襟：衣服の首回りの部分</p>
<p>折目正しい</p>	<p>礼儀正しい。</p>	<p>折目：衣服などを折りたたむときにできる筋</p>
<p>袖触り合うも 多生の縁</p>	<p>道で見知らぬ人と袖が触れ合うのも深い宿縁に基づくものである。</p>	<p>袖：両腕を覆う部分</p>
<p>袂を分かつ</p>	<p>行動を別にする。</p>	<p>袂：袖の垂れた部分</p>
<p>辻褄が合う</p>	<p>前後がきちんと合って、筋道が通る。</p>	<p>辻：縫い目が十文字に合うところ 褄：裾の左右が合うところ</p>
<p>帯に短し 褌に長し</p>	<p>中途半端でどちらの役にも立たない。</p>	<p>帯：腰のあたりに巻く細長い布 褌：袖や袂がじゃまにならないよう背中で交差させ両肩にまわして結ぶひも</p>
<p>紺屋の白袴</p>	<p>専門としていることについて、それが自分の身に及ぶ場合には、かえって顧みないものである。</p>	<p>紺屋：布地の染色を職業とする家や職人 白袴：染めていない袴 袴：腰から下を覆う衣服</p>

伝統の継承と新たなきもの文化の創出

項目	内容・特徴
<p>伝統の継承</p>	<p>京都には、伝統と格式を重んじる厳格なきもの文化が歴然と存在している。</p> <p>京都では、茶道や華道の稽古事などに関連して着る機会が多いこと、多く残る行事の際に「ハレ」のきものを着る慣習が色濃いこと、多くの寺社の本山・本社、芸道や芸能の家元など「和」の文化の源泉が存在することから、着る頻度が高い、目の肥えた使い手が一定数あることにより、きちんとした伝統と格式を守ったきもの文化を大切に維持継承している。</p> <p>こうしたきもの着こなしには、和の文化への深い造詣を必要とするため、難解であるとの声も多い。しかし、翻って、こうしたきものは、身につける人の文化的なステータスを表象する存在となるため、ここぞという場面で着ることのできる、質の高いきものが求められている。</p> <p>また、グローバル化が進むなか、国内外における、外国の人々に関わる場や国際的な催しで、きものを着る機会が増えている。このような場では、自らのアイデンティティを表現する日本の美意識の集大成ともいえるべき伝統を継承したきもの存在が欠かせない。</p>
<p>新たなきもの文化の創出</p>	<p>その一方で、住まいの様式が和から洋になるなど生活様式が変化し、結婚式など節目の行事に対する考え方が多様化するなか、きもの購入形態の主流も、嫁入り道具など親が子にきものを誂える形から、自分好みのきものを自ら購入する形へと変わってきている。インターネットの普及により、消費者同士の情報交換や交流も盛んになった。</p> <p>現在、きもの消費全体は落ち込んでいるものの、和の文化に注目が集まるなか、きものブームが起こっており、自分らしく自由にファッションを楽しめる、お洒落着・日常着としてのきものが求められ、結果として、アンティークのきものや浴衣も広く着用されるようになっている。こうした需要においては、伝統や格式にとらわれすぎない、着やすく、手入れが楽で、現代的なセンスにあった色、デザインのきものニーズが強い。</p> <p>このような動きは、きものを愛好する人々の裾野を広げる意味で重要であり、きもの文化の中心である京都には、悠久の歴史が育んできた優れた美意識、伝統の神髄を継承しながらも、時代の変化に即し、多様化するニーズに応えて、現代のライフスタイルの中で着る新しいきものや着こなし方の登場など、新たなきもの文化の創出が求められている。</p>

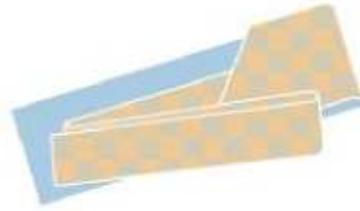
(参考) きものの種類等

項目	内容・特徴
きもの、 帯の種類と 小物	<p>(主な女性のきもの)</p> <p>訪問着：主に胸，肩，袖，裾などに模様がつながるように染めたきもので，広げると一枚の絵のようになる。略礼装として幅広く用いられる。</p> <p>付下げ：袖，前身頃と後身頃の両面，衿の模様が上向きに配置されるよう染めたきもの。訪問着よりはややカジュアルに用いる。</p> <p>色無地：全体を黒以外の一色に染めたきもの。紋がつくと礼装になり，紋がなければお洒落着となる。</p> <p>小紋：模様を一方向に染めたきもので，日常のお洒落着として着る。</p> <p>振袖：袖丈が長く，華やかに装う未婚女性の礼装，正装用のきもの。</p> <p>留袖：黒地で染め抜きの五つ紋をつけ，前身頃に絵模様を施したきもので，既婚女性の礼装として用いられる黒留袖，色地に三つまたは一つ紋で絵模様のある色留袖がある。</p> <p>喪服：弔事や法事に着る黒無地に五つ紋のついた喪の正装。</p> <p>浴衣：木綿地で，襦袢をつけずに素肌に着るもので，元来は湯上り着や寝間着とされたが，現在は祭や花火大会等で着用される。</p>
	<p>(訪問着) (付下げ) (色無地)</p> 
	<p>(主な女性の帯)</p> <p>丸帯：普通の帯の二倍の幅で織り，二つ折りにして仕立てられ，表裏に柄のある豪華な帯で，最も格式が高く花嫁衣裳などに用いられる。</p> <p>袋帯：丸帯に代わる現代の礼装用の帯で，振袖，留袖，色無地，訪問着，付下げといった，礼装・準礼装などに合わせる。</p> <p>なごや帯：お太鼓になる部分以外は二つ折りに仕立ててあり，締めやすいカジュアルな帯で，幅広く使える。</p> <p>半巾帯：通常の約半分の幅で，帯揚や帯締を使わない。浴衣等に用いられる。</p>

(丸帯)



(なごや帯)



(主な男性のきもの)

- ・ 正式な礼装は，紋付羽織袴である。
- ・ 黒以外でも羽織，袴で紋が付いていれば略礼装とされる。
- ・ 普段着としては，紬や御召，ウールのアンサンブルなどが用いられる。

(主な男性の帯)

角帯：幅約20cmの帯地を二つ折りにして仕立てたもので，一般に固くしまったものが用いられる。兵児帯より格式がある。

兵児帯（へこおび）：やわらかい羽二重やちりめんの生地を用い，長さは3.5～4mである。子どもにも用いられる。



(主な小物)

帯締：女帯をお太鼓に結ぶとき，形を整えて仕上げに締める紐であり，組紐と布の紐とがある。前者には丸く組んだ丸打ちと，平らに組んだ平打ちがある。

帯揚：女帯をお太鼓に結ぶとき，帯枕にかぶせて前で結び，帯を固定する。綸子，縮緬などを用いる。

半衿：長襦袢，半襦袢の衿に，汚れを防ぐことと装飾を兼ねてかける。

帯留：帯締と同様に，帯が解けないように用いるが，紐先に金具のついてるものをいい，普段着などに用いる。明治中期以降には，細工物を紐に通したものが多く現れた。

今後の予定について

1 京都市長への答申について

日 時 平成28年2月24日（水）午後4時～午後4時30分

場 所 京都市役所本庁舎3階 第一応接室

審査会委員の皆様の御出席をお願いします。

2 京都をつなぐ無形文化遺産「京のきもの文化」の選定

平成28年2月

3 リーフレットの発行

発行時期 平成28年3月

4 市民しんぶん4月1日号

京都をつなぐ無形文化遺産「京のきもの文化」

第2回“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」審査会摘録

日 時：平成27年10月6日（火）午後1時～午後3時

場 所：西陣織会館 7階「第1談話室」

出 席：柿野欽吾委員長，山路興造副委員長，池田佳隆委員，井上安寿子委員，太田達委員，田中京子委員，野瀬兼治郎委員，服部正毅委員，藤井浩一委員，山崎さちよ委員，吉田満梨委員
（欠席：金剛育子委員，宗田好史委員）

1. 開 会

2. 挨拶

平竹政策監：“京都をつなぐ無形文化遺産”は、今まで文化財の範疇にははいていなかったものを広く文化遺産として認めて、我々の生活の中で生かしていく、あるいは外に向けて発信していく、という趣旨で取り組んでいる。「きもの文化」については2回目の審査会となる。今回の事務局素案作成にあたってはどこに焦点を当てるのか、あるいは逆に焦点は絞らない方がいいのか、さまざまに議論しながら進めたのだが、専門家である委員の方々におかれては忌憚ないご意見をお願いしたい。

3. 資料説明（事務局）

資料：“京都をつなぐ無形文化遺産”「京のきもの文化」—伝統の継承と新たなきもの文化の創出—（選定書素案）。

4. 議 事

（軸足をどこに置くのか）

山路委員：私にとって、今回の「きもの文化」選定の方向性が今までの中で一番よくわからない。それは、「とても高度で、京文化の粋と言われるほどの技術にのっとって作られる（いわゆる特殊な）きものを伝統文化として保存継承していく」という方向性と、「京都が生んだきものに、一般の京都人も日常生活の中でなるべく親しんでいこう」という方向性の二つあると思うが、そのどちらをより重視するのだろうか。双方をめざしているのかもしれないが、何を重視すべきなのか、スタンスなのかがわからないと話が混乱するのだ。

私が関係する祇園祭を例にとると、懸装品を作る時は、技術保持者に（高くても）わざわざ頼み、伝統技術の保持を図るということがある。これは京都の特色の一つだろう。そういうものはめったにないとはいうものの、きもの場合は、どの程度のことを考えているのか。

事務局：伝統文化としてかなりページを割いて記述し、そういう点を理解してもらうのが一つの目的であり、他方、市民に着てもらおうということに合わせて、両方とも重要と考える。

（取り扱いの面倒くささ）

山路委員：一つ質問がある。一般の人は、きものというと洗濯を大変に感じ、お金がかかるのではないかと思うだろうが、素材と技術は相当進化しているのでしょうか？ 従来のような洗い張りという洗濯方法をとる必要のない、丸洗いのできる（洗濯機に入れられるかどうかではない、そのままの形でクリーニングできる）きものはどのくらいの比率あるのか？

野瀬委員：素材でいうと、もちろん合織のものは洗濯機で洗えるし、ごく一部に、ウォッシュャブルシルクという洗濯機で洗える絹もある。私が今着ているものは絹だが、普段汚れると衿をふく程度で（そのために半襟がある）、シーズンが終わると揮発油で染み落としをして片付ける。その染み落としを丸洗いというぐらいで、それもあって糸をほどいて洗うことは今ではほとんどない。多くの人は季節ごとにクリーニングに出すのではないかな。

井上委員：素材によって洗濯ができる/できないがあって、やはり丸洗いとなると業者に任せる。何枚もあると、請求書を見てどきっとするくらいの値段にはなる。

山路委員：値段が高いということもあるが、取り扱いの面倒さという点が普及のネックになっていると思う。

（学校教育における普及）

山路委員：学校教育の中で普及を図るということだが、京都の小中学校で、きものたたみ方（や浴衣の着方ぐらい）はちゃんと教えてもらいたい。きものは京都文化だ、という以上、基本的なことをひととおり学校教育の中に取り入れることは重要だ。

井上委員：私の通った小学校、中学校では、きもの着方を教えてくれる人が年一回来た。一回しかないで、それで覚えられるということはまずないのだが。

野瀬委員：中学校・家庭科の課程に基本的なこととして入っているが、強制ではないようだし、実際、それを教える先生がきものに精通した人かどうかは、疑問ではある。

池田委員：京都府の助成で作る（きもの着付けに使う）ポリエステルのが、ほとんどの高校に行き渡ったと聞いている。

事務局：P5に「市立中学校における浴衣の着付け体験教室の実施、「ジュニア京都検定」といった記述をしている。

柿野委員長：また、京都では、十三まいりなど子どもがきものを着る機会が比較的多いので、着る習慣がそれとはなしに身につけている、ともいえるだろう。

太田委員：子どもの十三まいりに初めてきものを作る、という家庭は昭和 60 年頃から増えてきて（それまでは洋服でごまかしていた）、今ではすっかり定着した感がある。（親世代では、子どもの幼稚園や小学校の入学式に、母親が黒羽織、黒絵羽を着ることが昭和 40 年代に流行ったが、昭和 60 年頃にはほとんどみられなくなった。）

（「京都の」きもの文化という表現）

太田委員：きものは日本全体のものであり、その中でなぜ京都なのか、に答えるためには、学校教育の中で大きく取り上げている点を挙げた方がよい。また、他府県と大いに違うところは装束文化だろう。たとえば時代祭などでは、靴用に先の丸い足袋を履くのだが、これは京都の分銅屋さんしか作れないという。そういったことも選定案に一項目を立てて書いた方がよい。さらに、P7の「京都のきもの文化の歴史」あたりだが、京都がミラノやリヨンと匹敵する工業都市であるのは、きもののおかげだということを書く。そして、今のきものができ上がってきた寛永文化あたりまで記述を広げ、東福門院と雁金屋の関係などを書く、きもの文化は京都が口火を切って、京都から全国へ波及した、ということも言えるのではないかなと思う。

柿野委員長：京都は、きもの流行を作る起点になっていたのではないかな。ものづくりがさかんで、そんな人たちの力も借りて、発信地になっていった、と。

山路委員：昔ならばそうかもしれないが、例えば、江戸時代に、丸帯をギョウギョウに締め上げていたのは、歌舞伎の女形（おやま）の流行を取り入れたからであって、桃山時代までは豊満な身体をある程度出して活発に動いていた。だから京都が起点とは、一概には言えない。神主の狩衣

や僧侶の法衣は、全国から注文が来たから京都の装束屋さんが全国に提供したので、それは京都発信としていいのだが。

太田委員：18世紀に東京に持って行かれるのは市場規模の大きさからいうと仕方がないが、祭り装束の産地は、間違いなく京都である。だから、選定案にまとめるときは、仏教関係の装束、神事関係の装束、祭り装束、能装束などレベルを下げてはならないないきものが京都にはあるのだと、書きように注意しつつ、書いた方がよい。

(歴史の上でも庶民のきもの文化に触れること)

太田委員：P12 素材に関する記述は絹がほとんどだが、庶民の麻や綿のきものに関する記述がないのは片手落ちなのではないか。京都としてどのような位置づけで扱えばいいかは専門の方のご意見を聞かなければならないが。

野瀬委員：貴族などの高貴な身分の人は絹を着たし、庶民については、もちろんハレの日は絹も着るが、普段は麻や綿を着ていた。

田中委員：庶民の木綿のきもの文化について、今日は資料を作ってきた。京都の着倒れ、大阪の食い倒れ、と言われる。京都の人は着道楽をして財産を費やしてしまうと言われるが、実際にはきものを生かして最後まで使い切る、着倒すことを指すのだと私は理解している。手入れの手間をかけて、作り替えることによって逆に衣装持ちにみせるという心理もある。

京都のまちなかの日常着としては、たらいでジャブジャブ洗え、たとえ糸をほどいても簡単に縫い直せる木綿が愛用された。大正から昭和初期まで、市内中心部には大きな木綿問屋・染め場があった。相楽木綿(さがなかもめん)、丹波木綿などは昭和30年代頃まで織られていた。麻は、戦後GHQに禁止されて作られなくなったため高価なものになってしまった。

また中世から、洛外の女性の仕事着としては大原女(薪売り)、白川女(花売り)、桂女(鮎、桂飴売り)、茶摘み女(宇治茶摘み)など地域特有の風俗があり、皇室や公家、藤原家などつながっているのが面白いところだ。

柿野委員長：生活の中で普段着るきもの、儀式の中でのきものに分けられる。冠婚葬祭、晴れ着としてのきものはわりあい根強く残るが、普段着のきものは昭和40年ごろには廃れていく。最近はまだ、普段着のきものも、少しずつ、素材を工夫したりして復活の兆しがあるということだろう。

山路委員：きものを着て台所仕事をするのがなくなっていったから、割烹着もなくなっていった。

野瀬委員：所得が高いから、高いきものを着るというのではなく、所得が高くてレンタルでいいという人がたくさんいる。現代の人は自由に使い分けをしている。ファーストフードも食べるが、高級レストランにも行く。その意味で、ここ一番のきものという着方もあるし、普段着のラフな着方もある、という気がする。私自身は、ここ一番のきものに接している方が多いのだが。

(新しい着方の発信)

事務局：市民にわかりやすく、というのがこの制度のコンセプトなので、京都の伝統産業については大筋を紹介しながらも、きもの新しい着方を京都として発信してはどうか、と考える。具体的な提案はできないかもしれないが、きものを着たいと思う若い人を応援するような取組を探りたい。

山路委員：発想の転換をすべきだろう。選定案に「きものパスポート」の話が出てくるが、「きものパスポート」の恩恵を受けているのは、京都以外の人が多ぶん多い。つまり、京都のまちをきものを着て歩く人が着るのは、自分のきものではなく、貸衣装だろう。それをしっかりと認識し、京都では若い人たちがきものを着るようになった、という甘い考えは持たない方がよい。まる

ごと貸してくれる商売が成り立っていて、「きものパスポート」のシステムを提供するなど、他府県の人も含めてきもの文化がどんどん広がっていく、そういった装置を持っている京都が素晴らしいのだ。

つまり、一つは、京都の人たちに対して京都のきもの文化を守りましょう、という取組を進めるのは正統なあり方として重要なのだが、もう一つ大きな要素は、京都の文化を商売に転換させて、京都以外の人たち、世界の人たちに広めている仕組みがあることも重要な点だろう。

野瀬委員：いまはレンタル 45%、買取 35%、お母さんやお姉さんから 20%といったところか。販売の顧客もずいぶん変わってきている。一等地に店を構え、何万部もパンフレットを配るきもの屋さんが、きもの姿の写真だけを販売する写真館に、圧倒的に水をあけられている。地域に密着して対面で頑張っている店は、頑張っただけ振袖を売っている。客の方も勧められる形によって、購入したりレンタルにしたり、と判断する。

山路委員：京都の呉服屋さんはさておき、地方の京染め屋さんがどんどんなくなっており、一方、地方でもレンタル屋が増えていて、京都に直接注文したきものをレンタルしている。

野瀬委員：今はインターネットの普及で、北海道の人が京都の呉服屋さんのウェブサイトを見られる。

(ホールプロダクトの考え方を)

太田委員：私は「きものパスポート」の特典をタクシーで得ているのだが、これが行き渡って、ホテルのみならずスーパーマーケットに導入されると、きもの人口は確実に増える。

藤井委員：京都では「伝統産業の日」のイベントで3月10日から20日の10日間は市バス、地下鉄が無料になる。10/365 できるということは、365/365 やるためにはどうすればいいのか、減益も試算しながら考えるべきだろう。「きもの特区」と位置づけ、きもので来たら楽しめるまち、きものに優しいまち、と言い切って文化創生のまちとして確立することが重要だ。

きものを着たいから茶道やお花、舞や謡いを始めたとか、お稽古事を始めたからきものが好きになったといった例はよくある。多くはいまや高齢化しているが、そういった入り口を各世代に向けて用意し、高級品もさることながらアンティークやアレンジを含め多様なきもので、ニーズに応える。そうやって、着る人が増えるとマーケットが拡大する。

ただ、マーケットが増えたとき、すべてがポリエステル、インクジェットでいいのか。P8 に伝統産業の項があるが、うちの団体(11社)ではこのすべてを網羅し、ワンストップで揃えられるようになっている(私は京鹿の子絞)。来年2月にはNYファッションウィークで、初めてのきものファッションショーをやるのだが、前評判でも日本の伝統技術は注目されている。最高級の仕事は後世に残さなければならない。技術はしっかり産業として残すことが大事なのだ。京都がしっかり伝統工芸を維持継承し、そのやり方をもって他地域の伝統工芸が残っていけるような道をつくる必要があるのだと思う。「乾杯条例」が全国各地に広がっていったのと同じように。

太田委員：ハレとケに分けて、市民に得になることを考えるとよい。お稽古事の比率が低い、一番きもの率が低い、と思われる山科区、右京区、西京区の方にどうやってきものを着てもらえればいいのか。イオンモールハナがきものを着ていたら2割引となったら、みんな必ず行くだろう。これはケの世界。

これに対して、ハレのきもの場合。先日私は、色が変わる織物を作ったが、そういった粋を尽した最高級のきものを着る機会があってもいい。そういうきものも残していく。

野瀬委員：私らでも普段は絹物ばかり着ているわけではないしね。

吉田委員：今の時点できもの自体が好きだから着ているのはマニアな人であり、マニアでない人にどう広げていくのかという話だろう。レンタルきものや写真館の売り上げが伸びているのは、自分

がきれいに映った写真がほしいから、祇園祭というイベントを最大限に楽しみたいから、という理由が大きいわけだから、製品が使う人にとって価値が出るためには、その製品のよさと、メンテナンスや着付けやいろいろなサービス、さまざまな着る機会との組合せ全体を提案していく必要がある。マーケティングでいうとホールプロダクトの考え方だ。京都の場合は組み合わせるパーツの資源がたくさんあることが一つの特徴。それを全体としてうまくつなぎ合わせる機能を担うところが不明確なことが問題なのではないか。

事業者、製造業者としては資料のとおりだが、選定案としてはP12「きものを着る人、愛でる人」の項の記述をもう少し膨らませた方がいいと思う。ハレのきものが強いまちである一方、ケのきものも伸びているという背景を調べると、2000年以降、アンティークショップが増えてきたこと、インターネットの普及（ユーザーが情報のやりとりを互いにする）が同時に起こった結果だ。あり得なさそうな組合せにみえても、何十年前にはしていたらしいとユーザーが認識するようになって、ケのほうの着方が自由になっている。

京都は学生のまち。インターネット上で繋がった人たちがオフで集まるキモノジャックは今や全国で行われているが、その発祥は京都の学生たちと聞いている。若い人たちの自由な発想により新しい活動も起こってきている。（守るべきものとの乖離はあるかもしれないが。）

山崎委員：ハレの日に着るきものと普段着があるということを市民が知れば、きもの文化の両方の側面を知ることができる。着れば着るほど、もっと着たい、違うものも着てみたいという欲が出る。

そのとき、高級なきものをみれば、それに向けてステップを挙げていくこともできるし、いろいろな選択があるのだと知る。まずは、手に届くんだよ、と思わせる構造になると一番いい。

山路委員：きものは一枚の布だからかさばらないのが利点だが、そうはいつでも収納するタンスしかり、保存方法しかり、若い人たちの気持ちの負担は大きい。それをどうするか。

服部委員：この9月、薄物（紗や絹）から単衣に衣替えになった。季節ごとに整理しなければならないのでクリーニング代は高くつく。流行があるので、仕立て直しもしなければならない。アンティークのきものはどうされているのかわからないが、アフターメンテナンスもわかりにくい。それらがオープンにされてない。きものを着続けていくことについてコストがかかりすぎる。

（きもの価格システムの問題）

服部委員：きものは販売についても流通コストがかかりすぎている。これだけのものを売るにはこれだけの経費がかかる、というのが流通業者の言い分なのだが、ものには限度がある。この二十年間、日本はデフレで、ものの値段はほとんど上がっていないが、素材だけが悪くなっている状態で、流通改革をしないと呉服業界は続かないと思う。

藤井委員：きものは流通が問題だというのはそのとおりだ。きものは外からは見えにくい。自動車は全国で値段が変わらないが、それとは違って、同じものに当たることがまずない。かたや10万円で売っているものが、かたや30万円で売っている。流通コストのかけ方も、売り方もいろいろだ。値段が安ければ売れるのか、というとそうでもない。着ないものは買われないので、着る工夫をいろいろな業界ではかかってきたが、それでも普及しない。さまざまなハードルがある。しかし、そうも言っておれないので、それらをひっくるめてアプローチしていくことが重要だ。「きものを着よう」という動機付け、着れば得するよというきっかけになるような方策を提案してゆければ。

野瀬委員：問屋の数は、京都は四大集積地の一つと言われるが、7割ほどを占める。商談は京都でする場合が多い。市場がある程度機能しているが、流通コストを高いのをどう是正するかは、ほんとうに問題だ。

服部委員：今はリスクを流通が持たないシステム。昔は問屋がどーんとコストも安く買って、小売りに

提供していくという形だったが、そのシステムが壊れている。小売業者は八割方、委託（買取はほとんどない）、つまり貸して売れた分を帳合いです。

（選定案における能装束などの扱い）

平竹政策監：選定案は「伝統の継承」と「新たなきもの文化の創出」の二本立てになっている、いずれにせよ、市民の視点で考えている。能装束などは高度すぎて、選定案の全体表現の中では位置づけが難しそうだが、それらも扱った方がよいのだろうか。

太田委員：一項目として取り上げる必要はなく、他府県のきもの文化との違いを際立たせるために、こういうジャンルがあります、という形で、京都のきもの文化の背景の奥深さを書くのがよい。他府県対策として、「みる」という文化もあるのだから。

柿野委員長：直接それがきものに結びつくものではないが、十日町とは違う、京都のきもの文化に厚みを持たせる存在として、現在のきもの文化を支える土壌として、ということだろう。

平竹政策監：「技」という意味か。

太田委員：そういうものがある、というのが京都文化の厚み。

田中委員：能衣装の柄は、茶道具や袱紗など名物裂（めいぶつぎれ）に使われているし、神主や巫女の衣装も朝廷や公家の影響があり、他府県に広範囲に伝わっている。その地域の年一回の祭りの衣装にもそれは表れている。すべてのルーツは京都まで辿れる。その流れは別の分野にも影響し、日用品にまで及んでいると思う。それは避けられない事実だ。

山路委員：西陣織も、ある時期、きもの以外に小物をいっぱい出して売っていたよね。西陣織のネクタイ。

服部委員：染め業者も、きもの柄をアロハシャツに置き換えたり、さらに冒険して新しい分野に挑戦したりしている。

池田委員：京都のプリントの染色業者は、ほとんどが元きもの染め屋だ。転換した。

野瀬委員：その意味で、京都のテキスタイル業者は、東京に比べて規模は小さいが、独特のテイストを持っている。

（きもの魅力について補足）

平竹委員：海老蔵さんのパリ公演を観に行った多くの日本人をみて、フランス人は「なんと画一的なドレスなのだろう」と言っていた、というのを先日、ユネスコのパリ本部の方に聞いた。きもの美、魅力をもう少し盛り込めないか。国内だけでなく、海外にも発信をしていくにあたって。

山路委員：スタイルは基本的に画一だが、その画一の中で模様や、帯や小物の組合せで仕事をする。島国の文化かもしれないが、それが文化だ。それを否定されてしまうと...

太田委員：私が今まで会ってきたフランス人、イタリア人は一様に「エレガント」。コーディネートの見事さを見抜いている外国人は山のようにいる。

藤井委員：洋装は、身体的特徴もあって着こなしは外国人には勝てない。きものは身体を包んでいるからこそエレガントだし、形はほとんど変わらないから流行がない分、エコだ。利点と考えるといいのではないかな。

池田委員：伝統的な洋装はコスチュームになるが、きものは平面にどれだけ表現するかということだから全く違うものだ。

田中委員：我が子が小学校で洋装と和装の違いを習ったとき、洋装は人体に合わせてカッティングしてあるため動きやすいが、和装は布を身体に巻き付けるため動きにくくて不便だ、と先生が言ったらしくて、我が子は「違う」と抗議したようだ。例えば、西洋の庭は人工的な造りだが、日本の庭は借景があったり、自然の物を箱庭化したり、ということがある。きものも、ポップな

デザインやしっとりした友禅が描かれていたりする平たい布を身体に巻き付け、折り紙で造形するように帯をいろいろな形に結んでみたりする。単に巻き付けて着るだけだが、逆にそれがフレキシブルで、奥行きを持っている。一見するだけではわかりにくいかもしれないが、海外にもそれをアピールできればよい。

柿野委員長：本日はみなさまから、さまざまな意見をいただいた。今後、事務局はそれを取りまとめてご報告させていただきたい。

事務局：今日いただいた意見をふまえ、修正して、11月上旬にはパブリックコメントを行い、市民意見を聞きたいと考えている。パブリックコメントは多数いただきたいと思うので、委員のみなさまにも広く周知のほう、ご協力をいただきたい。本日はどうもありがとうございました。

(了)